

を取られた藩吏がある。

オテマヘヒラキ 御手前開 ↓シンカイ

新開。

オトウアツツグ 大音厚續 通稱尙九郎・

主馬・帶刀。帶刀厚曹の子。寛政元年無祿にして人持末席となり、二年四月奏者番となり、三年四月家督四千三百石を襲ぎ、若年寄學校主付となり、七年十月十五日御家老に進み、九年九月七日四十二歳を以て歿した。

オトウアツトモ 大音厚曹 通稱典膳・七

左衛門・帶刀。實は前田近江守直堅の三男、寶曆五年四月大音主馬厚固の名跡として四千三百石を領し、六年寺社奉行、明和四年御家老、安永中兼若年寄となり、寛政三年四月十八日致仕して七百石を受け、南郊と號し、文化二年三月十二日八十四歳を以て歿した。

オトウアツモチ 大音厚用 通稱藤藏・主

馬。一諱厚甫・真尊・正泰。大井直泰の子で故ありて大音氏に改めた。幼にして前田利長に仕へ、八王子役及び大聖寺役に戦功があつた。父退隱の後家を繼ぎ、加祿四千石を受け、大坂兩役に従ひ、更に千石を加へ、寛永の初魚津城代と爲り、十三年を以て歿した。年六十六。長子伊右衛門早く歿し、次子助右衛門は大聖寺侯に從ひ、而して家督は智養子主馬好次をして襲がしめた。

オトウシユメアゲチマチ 大音主馬上ヶ地

町 元祿九年の地子町肝煎裁許附に、金澤鐵砲町の次に大音主馬上ヶ地町とある。大音氏は初め邸地を木・新保に有してゐたが、寛文二年の夏石引町に移轉し、その跡は地子町となつたのでかく呼んだものである。

オトウマチ 大音町 金澤の町名。小立野

のうちで、藩臣大音主馬の下屋敷を賜はつた地であるから、この名がある。

オトウマツリ 御當祭 能登の奥郡では、

神社の祭禮に氏子中から當番を定めて周旋する。それが御當祭である。門前町走出・清水二部藩の御當祭には古い唄ひ物があり、輪島町重藏神社のそれは、行事が奇異であることによつて特に知られて居る。

オトウヨシツグ 大音好次 通稱御六・七左

衛門・主馬。七尾城代前田修理知好の子で、大音主馬厚用の智養子となつたもの。祿五千石。初め魚津に居り、前田光高の襲封後金澤に歸り、延寶二年歿した。年六十三。

オトウヨシマサ 大音好政 通稱又八郎。

初諱政治。主馬好次の子。父の祿四千三百石を襲ぎ、三百石は弟三四郎好相に配分した。元祿二年歿。

オトガサキ 乙ヶ崎 鳳至郡南北郷に屬す

る部落。能登名跡志に『家數四十軒許、あさまなる村也。此村磯平にて、入江にあり。船を圍むに便よく、穴水へ近く、物毎に勝手よき故、秋末は磯邊に大船の絶えずあり、普請などする也。御收納藏あり。』とある。又能登誌追加に寛政八年九月下旬この村の畑に在る大石が自然に動き出したのを、玄翁で一角を缺いたら止んだとこのことを記するのは、殺生石の物語から脱胎したものである。

オトガサキカツセン 乙ヶ崎合戦 長家家

譜に、天正五年五月長綱連が、上杉勢の據る能登の富木・熊木兩城を陥れ、次いで穴水城を圍んだので、七月越後軍の響田肥後・唐人式部は救援の爲舟に乗つて押寄せた。この時孝恩寺(後の連龍)は、甲冑を着けず、白帷子・

竹の子笠で乙ヶ崎の山陰から出で、敵の兵船を奪ひ取り、首七十餘を取つたと記する。

オトガサキガハ 乙ヶ崎川 鳳至郡新崎領

山から流出し、乙ヶ崎領で海に入る。流程六軒許。

オトゴモチ 乙子餅 舊十二月朔日に餅を

作つて食ふを乙子餅というた。十二月は一年最終の月で乙子月というたからである。この餅を食へば水難を免れると信ぜられた。

オトシノワタシ 乙師渡 能美郡今江にあ

つた。越登賀三州志に、今江橋の下、木場潟の湖口であるとしてゐる。古へそこに渡舟があつたのであらう。

オトツルギシヤ 乙劔社 石川郡河内庄鶴

來なる金劔宮境内の小祠である。古跡考には金劔宮の相殿乙劔權現と記されてゐる。金澤の久保市乙劔神社は之を勧請したものであるといふ。

オトツルギジンジャ 乙劔神社 珠洲郡鶴

島に鎮座する。式内等舊社記に、『乙劔神社。直郷宗玄村鎮座。稱乙劔明神。舊社也。』とあるものであるが、宗玄とするのは誤である。能登名跡志には、『此村の氏神は乙劔大明神なり。安養寺といふ別當あり。昔は大社なりし由。』と記する。

オトナシガハ 音無川 鳳至郡矢波の領に

ある小川。能登志微に、山手に猪ノ平といふ散村があつて、その小川を音無川と名づけ、その水を涌かして用ひれば浮腫に効があるといはれ、文化の頃にはこの川を薬水川と稱したと記する。矢波川の支流である。

オトナビヤクシヨウ 長百姓 部落中で多

くの田高を有する百姓の稱。十村又は村肝煎

の捕佐をなしたが、寛文中組合頭存するに至つて長百姓の名が見えぬ。

オドロ 藪野 羽咋郡邑智院に屬す

る部落。享祿四年七月一宮惣分目納帳に、『壹段尾殿才連、おどの參段尾殿定金、貳段五尾殿典次郎。』と見え、又一宮社祿天正十一年閏正月廿九日前田利家の印書に、『當月一宮之御神幸加與丁事如先々可相調者也。』とあつて、宛所に中川村百姓中、おどの村百姓中とある。オドロはオドロノの義であらう。今諺つてウドノと訓ずる。

オトマル 乙丸 石川郡中村郷に屬する部

落。俗に西乙丸ともいふ。

オトマル 乙丸 河北郡小坂庄に屬する部

落。この持山の中に、高峠といふ城跡があつた。

オトマルヨシタカ 乙丸義方 珠洲郡廣栗

の人。通稱龜次郎。字は子敬、號は禮堂・栗村又は文嶺と號する。寛政十二年一月十五日に生まれ、十三歳の時京に上り、畫を四條派の松村景文に學んだ。天保六年一旦郷里に歸り、翌年再び上京し、以後全國を巡ると三十餘年、明治二年八月歸郷病歿した。享年七十。人となり清淡寡慾、終生娶らず。心を虚らして繪畫の研究に従つた。

オトモマハリ 御供廻 ↓オテマハリ 御

手廻。

オトリゲ 御鳥毛 ↓オナガエ 御長柄。

オナガエ 御長柄 藩侯の行列に携へしめる鎗で、御先三品の一つである。柄の長さ二間半、内一間金笛巻十段幅三寸宛。鎗印白き馬之尾六寸。鞘に鶴の尾を植ゑたから、俗に御長柄のことを御鳥毛というた。戦時には中